読売俳壇

矢島　渚男　選

吊橋は杣の動脈ねむの花　泉佐野市　布野　寿

【評】杣は樵のように人や山深い村など種々に使われるが、「吊橋は動脈」は秀れた表現だ。動脈のように生き生きと人々を繋ぎ働き続ける。そこはネムの花も良く見える所。あるもので済ます八月十五日　名取市　里村　直

【評】歴史の大きい区切となった敗戦の日。それからは食糧難の世に変って、食が中心的な問題になった。そのころを考えると今日の食事は質素にという。統計的に食べ過ぎな贅沢時代で体が心配になる。曳いて来てぬたりと昆布ひきはがす　札幌市　村上　紀夫

【評】「ぬたり」「ひきはがす」で昆布の粘りに迫る。昆布干場の光景。遠雷の音無く照らす夜の町　三原市　天崎　千寿

黒い雨知らぬ子増えし原爆忌　赤磐市　黒岩　博美

天変か梅雨入り梅雨明け区切りなし　国分寺市　加藤　武夫

螢飛び少し怪談めく会話　会津若松市　佐藤　秀子

一反の晒し棒巻く神輿かな　朝霞市　田口　純

神輿あと肩甲骨に捨て置かる　宇都宮市　松広　訓

対峙する白馬三山夏つばめ　東京都　瀬戸　悦子

高野ムツオ　選

宇宙でなく海でなく琵琶湖を泳ぐ　館林市　岡崎　武央

【評】琵琶湖で一泳ぎしただけなのに、なんというスケールの大きさ。対比されている世界が広大ゆえに生まれた言葉の効果。実際、ちっぽけな人間には琵琶湖もまた果てしない。磧へと皆集まり来原爆忌　出雲市　石原　清司

【評】どこの川の磧を思い浮かべてもいいのだろうが、やはり、広島の元安川。鎮魂のため灯籠流しに集ってきた人々が想起される。雲の峰ささへる峰の青さかな　東京都　吉村　恵子

【評】入道雲より、その下の峰の色にフォーカスしたことで、山脈のたくましさとともに立ち上がった雲の白さ、大きさがより強調された。蠅帳の中に小銭と走り書　霧島市　内村としお

妻逝きて娘が叱る猛暑かな　名古屋市　横井　昌義

銀の匙にわかに曇り白雨来る　たつの市　七條　章子

木道の遥かへ続き風薫る　柏市　藤嶋　務

球児らの泣くも笑ふも汗の顔　埼玉県　竹本　遊児

弾き合ひ引かれ戯れ揚羽蝶　山陽小野田市　磯谷　祐三

花みかんの丘や潜水艦浮上　川越市　益子さとし

正木ゆう子　選

車庫入れをひとりで出来て夕薄暑　登別市　寺島きしを

【評】ぶつからないよう、バックで車庫入れが出来たら一人前。昨日までは作者に先導してもらっていたのに、今日は一人で成し遂げたようだ。成し遂げたのは、家族の、誰だろう。有能にも無能にも見え汗つかき　吹田市　小森　孝敏

【評】ものすごい働き者なのか、ただ汗をかいているだけなのか。どちらであるかは、自分が知っている。見かけだけでは、わからない。帰省子にまずは告げたる逝きし人　座間市　戸田　順章

【評】離れ住んでいる子供に、わざわざ伝えるほどには親しくない人の死だろう。帰って来た子に伝えることは、他にもいくつかあるのだ。白雨くる真中に芯のあるごとく　埼玉県　小町　季生

船底の丸窓を波打つ帰省　大阪市　今井　文雄

水引草風が結びて紅と白　高槻市　黒田　豊子

山彦の棲まぬ下総青芒　白井市　酒井　康正

長らえていまさら何の酷暑かな　久留米市　緒方　英精

しばらくは虹待つこころ熊野灘　宇陀市　泉尾　武則

五人でも八等分のスイカかな　横浜市　池末　亮輔

小澤　實　選

一年の半分は夏かも知れぬ　土浦市　今泉　準一

【評】夏が長く、暑さが続く。すごしやすい春や秋という季節が、いつか夏に変わってしまっている。近年のあまりに異常な夏という季節の存在感を、端的に捉えているのだ。指先に小銭はりつく大暑かな　神戸市　天野かおり

【評】大暑は七月二十三日ごろ、最も暑いとされる頃である。買物をして小銭を払おうとすると、指先にはりついてしまう。疲れも感じる。水着の子下車せり海に着きたれば　名古屋市　可知　豊親

【評】家を出る時から水着を着て来たこどもである。海で泳ぐことをどんなに楽しみにしてきたかということが、そこから伝わるのである。ポタージュにぱらりパセリの微塵切り　武蔵野市　相坂　康

出陣の花火師の妻火打ちせり　さいたま市　秋葉　武彦

乾杯の藷焼酎も三杯目　宮崎市　いわいふう

乗客の窓に寄り来る花火かな　横浜市　杉山　太郎

夾竹桃家族写真は父征く日　東京都　斎木百合子

梅雨明けや遺品整理は終了す　京都市　夏　剛

匂ひたつ梅の夜干しを通りすぐ　東京都　望月　清彦

俳句あれこれ　成田一子（俳人）

人間性を保つもの

△屍あり旱天に巨き足投げ出し▽△爆撃に貨車が燃え出す夏の闇▽。いずれも私の祖父、須ケ原樗子の句。樗子は昭和十三年、飯田蛇笏に師事、三年後に出兵、南方での戦線の最中にも句作を続けた。句集『歩哨』のあとがきには、夜間行軍中にも馬を曳きつつ掌や腕に句を書き留めた、とある。戦禍の記録としての句もあるが、あえてことわりがなければ、戦争中の句と感じさせないものも多い。

△ドリヤンの甘ぬくき香に眠りけり▽△ゴム採りの乙女手首の輪を鳴らす▽△象洗ふ一声峡を震ふなり▽△マンゴー売る胡座を組みし女かな▽。これらに見られる「ゴム（護謨）」「象」などは季語としてポピュラーでないが、高浜虚子が以前「熱帯季題」として挙げていたものでもある。激しい戦闘のなかで祖父の人間性を保ったのは、熱帯の植物、甘い果実や動物たち、そしてそれらを俳句に詠むことだったに違いない。

題字デザイン・イラスト　福田美蘭